こどもが帰ったあとからは

俵 萠子

講談社

© 1970
MOEKO TAWARA
昭和45年3月30日　第1刷

定価　360円

Printed in Japan
落丁本・乱丁本は
お取替え致します

こどもが帰ったあとからは

著者　俵萌子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号 112
振替東京3930
電話東京(942)1111

印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　有限会社大光堂

0093-148302-2253 (0)

目次

1・あゝ、六年間　5
2・一日のポケット　23
3・最後のこども　42
4・七年目の旅　62
5・男の子　女の子　82
6・夫は他人　102

7・赤いランドセル　122
8・女の幸福　142
9・ブルーの世界　161
10・ドアのむこうで　181
11・かりそめの虚像　200
12・とり残される者　219

装幀　大橋歩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こどもが帰ったあとからは

1　あゝ、六年間

私の名は、東山京子（ひがしやまきょうこ）という。

二十九歳。東京都下、鈴虫郡、月見ヶ丘団地、一七六号棟三〇四号室に住む。

団地ぐらしをご経験のかたは、おわかりだろう。さよう。東京とは名ばかり。東京よりは、むしろずいっと、サツマ芋で有名な、さる県の県境（けんざかい）のほうに近い。見渡すかぎり畠だ。その中に、ある日突然、一大ベッドタウンが出現した。私の家は、そのタウンの空中の三階の、はしから数えて四番目の空間を占める。三〇四という数字は、空中の四角いコンクリートの箱につけられた記号である。

箱の中に、わが東山進（すすむ）くん（三十四歳）、長女・直子（なおこ）くん（五歳）、長男・剛（こう）くん（三歳）、それに私の、四人が住む。

東山進くんは、毎朝、この箱から出て、都心の大手町のK株式会社までいく。
団地バスが二十分。そのなかには、待ち時間もはいっている。団地バスは、乗ってしまえば六分なのだが、いつくるという保証はない。街道筋が交通ラッシュで混めば二十分に一台だし、気が向けば三台いっしょにやってくる。ときにはこの三台が、駅ごとに抜きつ抜かれつ、鬼ごっこみたいなことをやりながら走っていくこともある。
そこで、団地バスが二十分。西北鉄道の私鉄が三十分。乗りかえ十分。地下鉄二十分。地下鉄から会社まで歩いて五分。計、往復、二時間五十分、わが東山進くんは、毎日乗りものに乗っていることになる。ちょうど、新幹線で、東京から京都へ着く時間と同じだ。
たまに、すべての接続が、滑り込み、滑り込みで、一分の無駄なく、うまくいくことがある。そんな日は、パパのご機嫌は、確かにいい。
「ママア。けさ、タイミングよかったよ。七時五十分に出たろ。部会におくれるかと思ったら、着いたよ」
「へえ。ほんと、十五分くらい遅刻かと思った」
「ううん。どんぴしゃだった」
得意そうである。バスがうまくやってきたり、西北鉄道に、間一髪で滑り込めたりすることが、なんで東山進くんを得意にするのか。考えてみれば、つじつまのあわぬ話だと思うけれど、私はそんな時のパパには、さからえない。

さて、私の生活。

私の生活は、べつに解説するほどのことはない。先刻、みなさん、ご承知のような、サラリーマン女房業という単調な毎日である。

が、精神的要素もないではない。いや、精神的というよりか、ときには哲学的、社会学的、自然科学的雰囲気にも包まれることがある。

たとえば、この間の土曜日のことだ。

幼稚園が午前保育で終わるので、なーお（直子の呼び名）と剛と三人で、きのうのご飯の残りを、焼飯（チャーハン）にして食べていた。

焼飯を、つめたい麦茶でぐいと喉に流し込んで、なーおがいう。

「ママ、人間は、なんで死むの」

直子は、いくらなおしてやっても、〝死ぬ〟を〝死む〟と発音する悪い癖がある。

この種の質問は毎度のことだから、私も驚きゃしない。焼飯を頬ばりながら、

「生きてるものはみんな死ぬのさ」

といった。

焼飯の塩が、ちょっと薄い。

「だからさ、なぜ、生きてるものは死むときまってるのよ。なぜ、死ななきゃいけないの」

「死むじゃない。死ぬ」
「死ぬ、のさ」
「だから、いったでしょ。この前。もし、人間がだれも死ななきゃどうなるって。生まれてくるばかりで、ちっとも死ななきゃ、そのうち地球が満員になって、立つところがなくなって、宇宙へ落っこちる」
どうも、あんまり科学的な返答だとは、われながら思っていないが、細胞がどうのこうのなんていったら、なおさら面倒なことになる。
「サイボーって、なあに？」
こう、くるに決まってる。
この間は、これで納得したのか、しなかったのか、とにかく一応ひっ込んだが、その日はちがっていた。
「だったら、宇宙衛星へいけばいいじゃない」
やけに思いつめた顔で、きっぱりいう。
厄介なことにあいなった。ここはいちばん、やっぱり細胞と生命の話に切りかえるべきかと思った時だ。折りよく剛が、麦茶をひっくり返した。やれやれ。問答中断。私は風呂場へ、雑巾をとりに走った。
私となーおの禅問答、私と剛のナンセンス問答は、ときには私のたのしみである。ときには

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うんざり、いらいらのタネともなる。しかしそれが、単調な私の毎日を救っていることは事実である。

ここんところ三日間、パパと私は、あまり仲がよくなかった。

ことの起こりは、こうだ。

火曜日の午後、私が、一六八号棟の大橋麻子に会った。剛を、一七四号棟の前の遊び場で遊ばせていた時だ。

大橋麻子がやってきた。買物籠をさげている。たぶん、買物にいく途中だったんだろう。が、例によって、私の横にすわりこみ、ゆうに、一時間はぶった。

「おたく決めた？」

というのだ。

「なにを？」

「あらいやだ、小学校よ」

「決めるもなにも、決まってるじゃない。うちはC町だから、C小学校の区域よ」

「へえ？」

と麻子は私を、侮蔑的な目つきで、まずジロリと見た。そして、

「へえ、おたく、ほんとに地元へ入れるつもり？」
といったもんだ。
「じゃ、おたくは入れないの」
私は逆にききかえしてやった。
大橋麻子の長男・まなぶくんと、なーおは駅前産婦人科病院の同期生である。わたしが直子を生んだ翌日、大橋麻子が入院してきた。翌日まなぶくんを生んだ。
おかしなもので、同じ時、同じところで出産と格闘した仲間には、奇妙な親近感がある。男性にとってそれは、兵隊の時の友だちであろう。女性にとってそれは、産婦人科病棟の仲間である。同期の桜ということばが、いかにもぴったりするように思われる。
私はほんとうは、大橋麻子のようなタイプの女は好きじゃない。好きじゃないのにつきあっているのは、どういうわけか彼女が、妙になつかしい存在だからだ。大橋麻子の、あまり可愛気のない顔も、
（おかあちゃーん、助けてェ）
と分娩室で絶叫していたあの夜の声とだぶると、一種、ユーモラスにさえ見えてくる。憎めなくなってしまうのだ。
「ええ、うちは入れないわ」
大橋麻子は、きっぱりといった。

「どうして？」
「だって奥さん、このへん、ものすごく程度が低いのよ。見回してごらんなさいよ。畠ばっかりじゃない。百姓や土地成金の子とか、都心にいけない二流先生、おんぼろ校舎に貧乏財政、そんな学校は、やっぱりダメよ。だいいち予算がちがう、予算が……」
「どこと予算がちがうのよ」
「付属とか、M校とかH校とかよ」
「あなた、調べたの」
「もちろ。予算だけじゃないわよ。考えてもごらんなさい。自分の子を、はじめっから二流に仕立てる気ならともかく、一流に育てるつもりなら、一流の環境に入れなくちゃ」
「あなた、教育ママね」
　すると大橋麻子は、憤然と私に噛みつく表情になった。
「とんでもない。あなたのような母親こそ、教育ママよ。どうせ、あなたの知識源は、テレビとか婦人雑誌の教育評論家のセンセイがたのお話でしょう。けれどね、その評論家のセンセイがたのこどもがどうしてるか、知っている？　Q先生のお子さんは、二人とも付属よ。I先生の男の子は、K大の幼稚舎。G先生の……」
　とうとうと何人かのセンセイの名前を麻子はあげた。私は、そのうちの三人しか名前を知らなかった。

「もし、ほんとうに有名校へ入れることが有害だったら、どうして専門家が、自分のこどもを有名校へ入れるのよ。本で読んだ知識とか、表向きの一般論を頭からうのみにして信じ込んで守る。それこそ教育ママじゃない。自分の子は自分の子のペースで育てなくちゃ」

要するに麻子の議論は、「公教育はなみの子のためのものである。エリートはエリートにふさわしい教育をすることによって、エリートとしての力を発揮する。馬だってそうだし、人間だってそうだ。諸外国だってそうじゃありませんか。ヨーロッパやソ連なんて、徹底したエリート教育でしょ。幼稚園で知能テストをしてよかったんなら、エリート教育をのぞんで何が悪いの？　もし親が、エリートの素質を持った子に、なみの教育をして、彼の能力をフルに磨いてやらないとすれば、それこそ偽善的教育ママの害悪よ」というわけだ。

いわれてみれば、私はだんだん自信がなくなってきた。ひょっとして、なーおがエリートでないという保証は、どこにもない。それに、この間、幼稚園で知能テストをやったとき、なーおの成績は、まんざら捨てたものでもないと、先生がおっしゃったではないか。私はそれが得意だった。

してみると、わが家のノンビリ教育は、ひょっとして、トンビをタカにしないでタカをトンビにする教育なのかも知れない。はじめ反撥していた麻子の話に、私はだんだん不安を感じてきた。不安は、ぐんぐん大きくなっていった。

（そうかもしれない。うちは、あまりにもノンビリしすぎているのかもしれない）

私の動揺を見てとった麻子は、満足そうにニヤリと笑った。
「でもね、奥さん。おたくはお嬢さんだからまあいいけれど、男の子はね、そうはいきませんわ。あーら、たいへん、もう四時。それはそうと、もうすぐお誕生日ね、直子ちゃん。早いものね。じゃあね、ごめんあそばせ」
あっという間に、麻子は私の視界から消え失せたのである。

その夜、私が東山進くんに、やや改まった口調で、
「ねえ、パパ。なーおのことだけど……」
と話しかけたのは申すまでもない。
その時、パパは、DKの椅子からテレビのナイターをみていた。
「うーん」
聞いていないということが、私にはすぐわかった。
「ねえッ。パパッ」
「あっ、こいつは、はいったぞ」
東山進くんのからだが、前にのり出した。
「よし、はいった。もらった」

「あのね、直子の学校のことなの」
「うん」
「付属かなんか、どこか受けさせたほうがよくはないかしら」
「なにが？」
「小学校よ」
「チェッ。だめだなア」
「なにがダメなのよ」
「長嶋だ」
「パパッ」
私は、大声を出した。
最初から感情的にはじめたのが、まずかったのかも知れない。
延々と私が大橋麻子のうけうりをやったあとに、東山進くんは、ただひとこと、
「くだらん」
といったのだ。
しかも耳には、まだイヤホーンがはいっていた。
テレビのナイターが終わったので、ラジオに切り替えたのだ。私を警戒して、イヤホーンをつかっている。その未練たらしい東山進くんの格好までが、私のカンにさわった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com